

翻刻・手銭記念館所蔵俳諧伝書（四）

— 手銭記念館所蔵俳諧資料（八） —

伊藤 善隆^a

^a 湘北短期大学非常勤講師

【キーワード】

俳諧 伝書 手銭冠李 『俳諧根本式』

はじめに

本稿は、島根県出雲市大社町の手銭記念館に所蔵される俳諧資料の中から、『俳諧根本式』（写本一冊）を翻刻紹介するものである。

手銭家は、貞享年間に大社に移り住んだ喜右衛門長光（寛文二年（寛延二年）を祖とする商家で、町役の大年寄を長く勤めた。歴代の当主は文芸にも関心を寄せ、和歌・漢詩・俳諧に熱心であった。

本書には、序文や奥書がなく、成立や書写者、書写年次などは不明である。しかし、巻頭（第一丁裏）に、「冠李」の蔵書印が捺しであることから、おそらくは、冠李（享保四年〜寛政八年、三代目当主季硯の弟）が、自ら書写して所蔵していたと推測されるものである。なお、本書と同じ罫線を摺った料紙を使用し、筆跡も共通する『俳諧十五篇』（手銭記念館蔵本）については、前号に翻刻を掲載した。本書は、たんに冠李に関わる資料というだけでなく、近世中期の大社でどのように俳諧が享受されていたのかを探るためにも重要な資料である。

〈書誌〉

書型……写本一冊。袋綴じ。楮紙。
表紙……灰色布目表紙。縦二三・五cm×横一六・四cm。
題簽……左肩単辺。「俳諧根本式」と墨書「題簽の単辺も墨書」。
写式……罫線（每半葉一〇行）を刷った料紙を用いる。
字高……一八・九cm（本文巻頭「一根本式ありし」を計測）。
丁数……全三七丁（墨付き三七丁）。
その他……第一丁裏に「冠李」の蔵書印を捺す。

〈凡例〉

翻刻にあたっては、句読点を補い、改行を適宜改めた。また、片仮名は平仮名に、異体字は概ね通行の字体にあらためたが、小字で添えられた語尾や助動詞の片仮名など、原本の表記を残した部分もある。濁点は原本のママとした。

原本の各丁片面の終わりに当たるところに「をつけ、（）内」にその丁数および表・裏（オ・ウ）を示した。
誤記と思われる箇所も原文どおりに翻刻し、適宜その傍に「（ママ）」を付した。難読の箇所は□で示した。虫損により判読が困難な箇所には、その傍に「（虫損）」と付した。
参考のため、原本の図版を最後に示した。

〈翻刻〉

俳諧根本式

俳諧根本式

（白紙）

〔冠李〕（蔵書印）

┌ (表紙)
└ (表紙)
┌ (オ)
└ (ウ)

俳諧根本式

一、根本式の事は、昔、鎌倉藤か谷にてありし古式にして、それを洛の清水寺に伝へ有し故に、清水連歌とも言也。紹巴など古をしとふ心にてせられたる事有。

一、八花八月也。但シ、七花七月にも或は六花七月の例もあり。名残裏の月やつしてもよし。古方に八花七月也。

一、表十句、此十句の内、名所かまはず、必一句あり。但し、出すに句法有。本條四年、宗安昌休の詞は、明切にて有所なる事を、画を嫌や、口伝有。」(三)

一、初折の裏十四句、二三の折、常のことし。名残の裏六句也。

一、華をやつす時は表の花なとかよし。やつす時には、表の花、二ツ也。六本、又は七本ある物なれば、必桜をも花の座にしてよし。或は、他の季の花なとすへし。

翁曰、花は桜にあらず。桜にあらざるにもあらずとぞ。さるから歌題にも花の題に桜は読とも、桜の題に花は詠せず。花とは桜を第一として」(三)、扱、万花のはな也。三春艷色の名也。しかれば、花の句法なりて、猿みのにも糸さくらの句出たり。口伝。

一、景物ならへて三句すへからず。又、打越嫌ふ也。

一、月と花と雪と杜宇、寐覚といつれも打越を嫌ふ也。

一、桜四本。但シ、表に花、裏に花と桜をすへし。但シ、桜苞本にてもよし。他の季のたとへ花なとをつかふ故也。月見渡しに一句

つ、都合八ツなり。」(三)

一、名の裏六句の内、月花あり。句ひの花と若花との間、近ければかならず他の季の花をすへし。句ひの花は表の花也。若花は表の花也。自然若花春の季なら

は、句ひの花他季たる也。

本式、第三に名所、又十句目に名所をする也。たとへ発句に千鳥あれば、千鳥の語へ合せの名所をする也。雪月花、いつ

れも同前。岫雲本式には六句めに伏見を出せり。発句、花也。

本式、表にほと、きす寐覚といふ」(三)言葉一ツ有へし。寐覚の事、口伝。

一、同季七句去。但、間に他の季を隔てつ。

一、名所五句去。降物、聳物、艸木、おのく二句去りなり。

一、月、花、松、舟、夢、洞、竹、煙等、十句去。

一、岩、猿、関、椿、竹、楨、山類なり。

一、発句に賦物を取へし。連歌には五箇の賦物、路、松、山、舟、人の外に定りたる文字あり。はいかひには、いつれなりとも興ある字を取へし。

此印は明応元に改りたる式目也。此外の式は応安新式のことし。

賦物取やう、脇第三まで取やう次に委しく弁あり。下の句とく、上の句とく、并へると言古伝あり。無用の事也。

規式俳法
一、二三日前より一順を作る事も有。

一、本尊はいつとても天満宮を掛奉る也。」(四)かけ所、北面を忌む。其外方角はなし。

秘伝言、古今集俳諧哥
梅の花見にこそきつれ鶯の人來くといとひしも居、とある哥は、よみ人しらすとあれとも、菅神の詠なり。

一、三寸洗米、時の木の実、香。但シ、香のつきやう、神祇香。口伝。

一、追善の会には、其人の筆跡か、」(五)又は画像など掛る事、勿論也。一、賀、追善、饞別会にて、おのく発句ある時は、或は題を探り、あるひは短尺にても、硯箱の蓋に入れて、本尊の前、又は文台の前

に置也。

但、たんざく三折にたみみ(ウイ)、ならへ、一ツ横に置。巻頭上也。

巻軸下也。いつれも、横に置事也。

一、文台の上に昏二帖、水引二把、文鎮。

昏二帖置事も有。本式の時、(ウ五) 懐紙を直ニおきてもよし。

座さはきよき也。

一、硯筥の内、新筆一对、墨、小刀、錐、耳搔を入れる。

一、文台の上に昏二帖置て、硯箱等上に置。本尊正面敷、又は左の方へ居て置へし。文台かさり口伝。

一、席札の寸法三寸七。又は八寸半。此両説見合にすへし。一畳に二人つ、の積りにして、席札、なげしに張る也。(ウ六) 板札なれば、かける也。

【執筆】

【宗匠】

【客座】

【連中】

其人の俳名

右一 右二 左一 左二

右のことく席を配るへし。

一、五條式、座の正面に張るへし。

五條式は為弁に委し。資巻に見合へし。附録礼法に書乗ス。

一、神明会の時は、香、線香等不用。口伝。

会式

一、会定日、朝頓に寄る粥を出すへし。

一、宗匠は別間に居るへき事也。

一、連中集會して各礼服をぬき、茶、たはこ等にてくつろき、一順を附る。是を寄一順と言也。句毎に、宗匠の居間に小童にても持せ窺ふへし。是は、終日規式に座を詰るゆへに、かくくつろき居る事也。

一、一順附終りて後、宗匠に出座可被下旨申入る也。此時、本尊へ

香を、(ウ七) 宗匠の席へも線香など立る事も有り。なれとも是は略してもよし。

一、宗匠しはらく気を静め出座有べし。座布の入口にて蹲踞し、一礼して本尊を拝し、我席に着へし。

但、探題硯蓋などに入て、本尊の前、又は文台の前に有時には、巻頭を取て懐中し、席に着へし。座布歩行、本尊のまへにて膝行、座に着やう、口伝。

【(ウ七)】

一、次に連中客座上座の配り、老人つ、脇指は次の間に置へし。若又、武家など脇指をはなしかたきといふ人あらは、其座の時宜有るへし。他流に扇の要ぬく事あれ共、不用。宗匠も連衆も扇子は持てよし。しかし、扇の音高くつかふへからず。連衆、座布入口にて蹲居し、静に進んで本尊を拝し、其時短尺あらは各取て懐中し、席札の(ウ八) 下に着へし。連衆着座すみて、奉行か宗匠より執筆くと呼ぶ。二声めに執筆席に出る。式礼前のことし。

一、執筆座に着て、文台を直し、硯箱を文台の右におろす。口伝。

一、硯箱の蓋を明、硯箱に并へ置。口伝。扱、文台の上の昏、水引等を硯蓋に入置、水入を取て水入の座に水をこぼし、水入を脇に置、次に一对の筆を取て(ウ九) 両方のほふしをぬき、筆を撰、筆先の糊を、水入座にこぼしたる水にて、ひたしとく也。口にて筆を解

へからず。若又、硯箱に筆ぞ、きあらは、水入の座を用ゆるに及す。筆の糊解終りて、文台の筆かへしに筆を乗かけ置て、此時より始

終筆は硯箱に入れぬものと心得へし。執筆は左の膝を立、右に筆を持、筆を下に置ぬ事、礼法なれ共、(ウ九) 終日の事なれば、折に

は膝を休め、筆を筆かへしに乘せかけ置也。次に、水入座に入たる筆ぞ、き水を硯に入、足らぬ時は水入の水を添ふる也。墨の摺よふは、の、字形にするへし。次に懐中より一順を出し一順有、書字有、

文台の上にひろけ、文鎮を置、又次に硯蓋に入置し昏を一帖取、

上紙を除、二枚つゝ、横二ツ折に重ねて折ル。二重、^(ウ九)一重は、硯蓋、残昏と一所に置いて、次に一重の昏を文台に置、一順を書也。口伝。中を引出し、初より書候事は悪し。口伝。一順を兼日より調たるは、兼日一順と言。其日作るを、即座一順と云。又一順調へずして着座あらは、文台さはき仕舞、執筆より小声にて宗匠へ、御発句はと申窺ふへし。

但、当日の発句にあらず、兼題にて^(ウ一〇)一順きはまりてあらは、始まらぬ先に一順と、のへてよし。いつれにても、懐昏に書時、賦物有之候哉と、執筆より宗匠へ問ふものなり。

一、執筆一順を書時、勝手より銘々硯を宗匠始連中に出す也。硯箱の上に、昏二帖乗て有。重硯十組なれば五組つゝ、上に昏一帖つゝのせ置て、宗匠の左の座へ置く。左右の人々、^(ウ一一)昏硯を銘々取て廻るへし。

一、賦物定りの書様

賦何々々俳諧之連歌

賦物等の事は数多ゆへ、爰に略す。猶、荒まし先に弁す。

一、根本式の時は、かくのごとくにしてよし。規式の時、俳諧百韻として、連歌の二字をか、ぬ也。我家の式、故有。口伝。

一、旧式の時は、決而横懐昏也。堅懐紙は、規式会には用てもよし。^(ウ一二)

一、次に一順を懐紙に書終て、読挙る也。吟声、口伝有。発句、二遍也。二遍めに俳名を読む也。脇は一遍にて俳名をよむなれ共、作者によりて、賞して脇二遍よむ事もあり。先^(ウ一三)は一遍なり。

市中は物^甲の匂ひや夏^乙の月 俳名

あつし^甲くと門^{大甲}々の声 同

各、我名を聞て一拝すへし。読師も、はじめ一順はかり俳名を挙へし。^(ウ一四)

一、是より座着一順と言也。おの^(ウ一五)句順に附る也。連主、句を案し定て附る時は、小声に成て附句と言。執筆左の膝を立て待^(ウ一六)。作者小声にて附句をいふ也。但^(ウ一七)、当流は句をとなへずして、小短尺に書付て執筆の座に持参する也。小短尺、別而寸法はなし。見合にしてよろし。兼而、小短尺を硯筥に添て出し置也。

一、右小短尺にて附句する時は、小短冊^(ウ一八)うけ取渡し、口伝有。連主の内に、老人などあらは、小童に持せ遣してもよし。老人たり共、執筆小短冊を受取時は、座しなから一札あるへし。是は、宗匠の指図にまかせてよし。

一、執筆右の小短冊を受取、句を見て、さし合、去嫌を吟味する也。指合、去嫌ある時は、二ツに折て文台の先に出し、もとの前句を吟する也。^(ウ一九)二遍吟すへし。かへされたる小短冊、小童など取にやるもよし。

一、右作者より附出したる小短冊の句、さし合、去嫌なき時は、宗匠へ出すへし。句の善悪、執筆より言へからす。句をみるは宗匠の役。さし合去嫌を吟味するは執筆役也。

一、右小短冊の句を、宗匠見て、趣向の悪布は戻すへし。句作はいかやう共、直^(ウ二〇)へし。

一、右、其ま、か、又は直りたる小短冊、宗匠より執筆請取、懐昏に記るして、先吟すへし。是連中へ、早^(ウ二一)知らせ、銘々懐昏に記させん為也。其次に、懐昏に記し、前句一遍、附句一遍吟へし。すへて連中附なやみたる時、追声とて、前句を二遍はかりつゝ、吟すへし。尤、月秋の座、大華前、まへ^(ウ二二)の花の座、二三名残の表裏等、断へし。

一、右、座着一吟附揃たる上にて、宗匠か上座より安座^(ウ二三)と二遍言ふへし。此時みなく安座すへし。執筆計、安座すへからす。此時、茶、たはこ等出すへし。但^(ウ二四)、銘々盆に塩打豆やうの楊枝

入らずの菓子を出へし。菌音やかましき菓子は用捨すへし。本方は南蛮菓子也。執筆は、たはこ、茶、酒、菓子等にも喰ふへからず。猶たへかたき時は、勝手へ」(一四) 入て養ふへし。此時、いつれ成共、跡に代りを立て置へし。連中の中よし。

一、執筆より名残の裏と断る時、菓子盆たはこ盆等、みなく勝手へ入るへし。此時、宗匠はしめ、連中蹲踞すへし。表一順のことに句ひの華を乞ふへし。揚句は功者の人、又は親族などへたのむへし。」(一四) 少しつ、辞義あり。会釈済たる時、連主は句の高低にかまはず早ク附へし。但シ、一座の□、茶、たはこ、香、其外、奉行、会頭より指図有へし。

一、右附句終りて、執筆懐昏を閉る也。閉ぬ先に端作を書へし。図のことし。

(別紙添付)

年号月日

於何々亭興行

。穴 穴。

賦何守俳諧之連歌

市中は物の○には

ひや夏の月。名

。あつしくと

門くの名

。印は墨つき也

「(紙別)

一、端作を書いて、其後閉る也。閉やうは、水引上三筋、下二筋也。硯箱は、冠棚、違ひ棚杯にあげて置、反古等を直す。」(一五) 此時、銘々硯を勝手へ引也。次に、文台に懐昏をのせて、本尊へ備る也

前等。直に取て左の膝を立て、本尊へ向ひ、読あける也。本式は、字頭を我かたにしてよむ也。但シ、本尊へ手向すして、執筆居ながら読事も有。おのく名をよむ時、一礼すへし。句ひの花より挙句までよみかえず也。是真也。艸の時、あけ句はかり二遍よむ也。読師ある時は、執筆は読師の脇へ下り」(一五) 居へし。

一、右読終りて、懐昏の字頭を我方へむけ、本尊へ備へ、一拝して硯蓋を文台の前に直し、執筆立んとして身をそむける時、宗匠をはしめ満座一揖すへし。是は執筆へ御苦勞と言心也。執筆は請我心にて一揖する也。然して立て元の座に退ク也。

一、執筆もとの座に戻りて、満座各一揖す。是は宗匠へ御苦勞と言心也。」(一六) 宗匠も礼を請る心にて、一揖すへし。但シ、夢想の会は、此時に夢想主より扇をひく也。扇、口伝。賀の会などは、小諷、酒盛など、此時より能ほと有てよし。長座は無用也。又、追善の会なれば、おのく此時捻香あり。但し、宗匠より立て次第に捻香有へし。

一、常の会にても、右宗匠へ一礼、宗匠立んとして、客座の人に一揖す。客座の人々、請る也。宗匠立て」(一六) 本句ある時は、短冊を捧て硯蓋の中に入ル。口伝。本尊を拝して、我座にかへる也。連主、皆同し。発句ある時は、捧置事皆同し。但シ、座を立んとして、次に立人に一礼すへし。末々まで皆同し。連主拝し終りて座に着、宗匠か会頭か、執筆くと呼ぶ。執筆出で神拝し、一礼をなして短冊をそろへ、座順の通り、宗匠より次第く」(一七) 読あける也。一枚つ、小指の間にはさむ。猶口伝。ことくく読おはりて、硯蓋の中へ捧置也。本哥の時は、水引に閉る也。一拝して、執筆、座にかへるなり。但シ、探題なき時は、執筆くと呼ぶより以下の事はなしと知るへし。執筆座に着おはりて後、会頭より退座くと言へし。宗匠より次第に立て入る也。

一、会終りて後、本尊其ま、にまさ(ウ一七) おさむへし。

一、会席膳出来候は、吟中にも出してよし。座のま、にて食ず、執筆は本の座に帰りてくふへし。出来合さる時は、会後にてもよし。但し此時は文台の直しやうあり。口伝。置時は文台の直しやうあり。口伝。又言、安置を断る時、本尊を掲し、常の像をかけ奉り、口伝。

一、会后翌日、亭主より宗匠へ礼に行へし。連主は亭主へ行へし。

一、艸の会は、俗人羽織袴にてよし。(オ一八) 右本式、事少しつ、略してよし。略式なるかゆへなり。但し野坂の流に附句上の句の時、扇を堅に置。

一、平会式の時、文台を立すして、扇形の物を昏にて作り、文台の心には是を用ゆ。

一、寄一順は、堅紙にて四ツ折にして、中の折り目の前より発句を書へし。表に八句書也。裏に十四句書也。表(ニ)一順と前に書へし。図のことし。(ウ一八)

(別紙貼付)

表

| | |
|----|------------|
| 一順 | 市中ハ物の句ひや夏月 |
| | あつしくと門々の声 |
| | ----- |
| | ----- |
| | ----- |
| | ----- |
| | ----- |

裏

| | |
|---------------------------|--|
| 此裏 <small>(ニ)</small> 十四句 | |
|---------------------------|--|

中折目

右句の下名書へし。

「(紙別)

一、千句法、万句、矢数の事。千句は十百韻にて百韻十卷也。発句十句の内にて、春三句、夏二句、秋三句、冬二句なり。又、発句十句ともに花を以仕、月はかりする法もあり。巻頭の句、たけ高き句をすへし。うたかひの切字などすへからず。千句の時、十二枝のある竹を二本、神前へ立る也。左の杖より百韻をかけ初、次第く(ニ)にかける也。

又、懐帯かけとて、手拭かけのとき(ウ一九)物をこしらへ、懐紙をかける度毎に喚鏡(ウ二〇)をうつ也。打やう、小大と二ツ打也。

一、題は、初霞、梅、鶯の類よし。俗過たる題、有へからず。尤、恋、名所等を入るも有。名所のほ句は、雑しかるへし。又、横題にても慥成を撰へし。発句十句の内、雪、月、花、名鳥等の景物あるへし。

一、一座に一句の物、鱗、鳳、亀、龍、鬼、女等、けやけき物也。女の事、古式とは違ひ、男同前にさはく也。おに味噌、鬼(ウ一九)等の異躰にてはくるしからず。亀屋まんちう、亀井等はゆるすへし。龍以下も蒔絵などはあるへし。千句は十百韻を一日に満座する也。十百韻を百韻(ニ)にてさはくへし。千句はすへて千句にてさはく也。続千句と言は、巻頭のほ句はかりにて九百韻は発句なし。尤、表の所は八句にすれとも、神、釈、恋、無常等をせぬ法、礼にもあらず。発句(ウ二〇)なければ、第三のとまりもなし。

一、万句は、百韻百卷也。発句の割も、其外大概千句に準ず。古来は独吟也。矢数はいかひと言ふ也。近世は人を集て興行す。人数の多き時は、文台八、机か十脚も可有。矢数句の仕やう、はこひに心得あるへし。自句三連五連とも言也。作者分別あるへし。

一、句見 時の宗匠一人つ、文台に添。(ウ二〇)

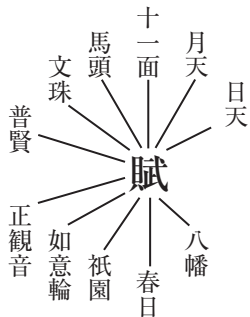
一、執筆 達者を撰て十人計。

- 一、喚鐘 千句くは是を打也。
- 一、宗匠 心身のおさめやう可有。
- 一、万句千句の時、巻頭のほ句は短冊に認、座中にかけて置物とやらんうけ給りぬ。今様之式、伝法の書も有か。伝曰、笹に付、又はたんさくかけに掛るを言也。

〔白紙〕

〔ウ三〕

〔別紙挿入〕



心敬 兼載 尚能 弟能 弟員 各在判
右之條々和哥明鏡也。歌道増進之志深輩は御免可有。穴賢々々。



〔紙別〕

〔※線は朱筆。線の正確な起点・終点は、参考図版7を参照。〕

賦物取様の事

一、賦物に、冠賦、杳賦と言事あり。たとへは、冠賦と言は、何山之俳諧と書出^スなり。松のほ句ならば、松山と請る類也。杳賦の時、山何之俳諧と書。山ほと、きすと請る類也。山、路、木、人舟とて、多^ク此字を以て賦物に取也。是は連歌の式なり。五ヶの本導とて、秘決せし連哥の教あり。

山ハ伊勢 路は住吉 木は春日〔ウ三〕 舟玉津嶋 人北野なり
是心敬僧都等の伝法也。我家にて文字に心得あるへし。幾暁曰、賦取様大旨連歌のことし。しかれ共、連哥は文字きはまり、俳諧には興のある文字を用ひ、はいかひの躰を取る也。

何飯として、麦鶉の発句なれば、麦飯と成^ル也。是、俳諧のおかしみ也。脇、第三に賦字とる時は、ほ句の〔ウ三〕 賦字定りて、其字に合せて大飯ととれば脇句に入る也。第三も同じ。発句は、発句定りて、夫より賦字を定む。脇、第三は、ほ句の賦字定りて、是に合せて又定む。是秘藏の説也。むかしは、面八句も取しか、第三迄か、又はほ句はかりにてよし。連哥も、今は第三までも取らず。しかれば、はいかひも、ほ句はかり取てよし。〔ウ三〕

一、建治二年桐か谷にて為鋪^ツ卿、千句の賦物を取れる事あり。応安四年三月六日地主の会にて、是を略して一折賦物を取、或は面十句、又は第三までにち^ゞまれり。当世の宗匠は、其席の見合によるへし。万端宗匠の指図に随ふへし。

- 一、一字露頭 寐を音と取。
- 一、二字反音 松を妻と取。
- 一、三字下略 一つを人と取。
- 一、三字上略 桜を蔵と取。
- 一、三字中略 千鳥を塵と取。

〔ウ三〕

此外 四字上下略、中二字略、五字中下略、中三字略、有。

一、借音 化粧など、有句を、他の字をかりて毛ときかしむる。露頭ともし様なれ共、借音は声をとる。露頭は訓を頭との違也。

一、除篇 鱈と言字を、篇を除、雪と取。松を公、明を月と取類也。〔(二四)〕

一、他添 一句の中に毎の字あらは、木を加へて梅と取類也。
一、連読 梅を鉢と取、花を餅と取。此類さま／＼有。可考。右之品々、第三までか。面十句の時は、ちと遠慮ありても可然か。立車曰、一字露頭、二字反音、以下は用ゆへからすと。

されは、根本式の時は、古法の連式によるゆへに、爰に此法を引出せり。〔(二四)〕

根本式 附録秘決

一、常のはいかひと違、面十句、裏十四句、二ノ十四句、二ノ裏十四句、三ノ面、三ノ裏、各十四句、名残ノ面十四句、名残裏六句也。

景物之事

一、或説云、雪、月、花、郭公、寐覚、名所、面よりはしめ、七つの裏表に用ゆる也。名残の裏にては、花一色也。依て、華八本と月七ツ也。かくし景物。口伝。〔(二五)〕

格式名所之事

一、山ハ、比叡、寺ハ、三井、郡ハ、山城の国宇多郡、橋ハ、宇治、郷ハ、山城の立田の郷なり。此外、山寺、郡、郷、橋、他方を不出と言也。

此二説、野坡家の伝也。わけて名所の段に信用しかたし故あり、以下ノ口伝ニ出ス。山は比叡以下は、無名に出る時は五ケのおしへとて、寺は三井と立る事、哥連の言所也。

面十句之内用不用之秘決

○此印は天水抄ニ出たる説也。

〔(二五)〕

可用物

一、木之類

松 杉 桧 柳 木ノ若葉 樗 梅 桜 茂ル木 木葉 紅葉 落葉 木隠 槇

一、艸之類

若草 草の若葉 藤 萍 芦 薄 荻 萩 葛 野山色付 晚稻早稻 門田 刈田 冬枯野山 苺 菊 浅茅 道芝 茂る艸 蔦水の深みとり浅みとり

一、竹の類

直竹 呉竹 竹の林 若竹の類

一、虫の類

虫 蚩 蟬 蛭 松虫 蛙

一、獸の類

鹿 駒 人偏可嫌の外は何も可有也。

一、鳥の類

鶯 杜宇 鴈 雲雀 鴨十句め 鶯同 鴉同 小鳥村鳥かりは共 千鳥鶉九句め

一、水辺の類

渚 沼 海 浦 湊 堤 沖 磯 干潟 岸 川 川つら面共

一、池湖

波 水ぬる共 氷 汐高 橋 瀧 入江 津 水上 柴橋 船をし 泊りとま 渡

一、山類

山田里 嶺 高地 遠山 尾上 禁 谷 岡 棧 瀧

一、居所類

軒 垣 簾釣共 戸 枢 窓 里千 門 庭〔(二七)〕 外面住

一、旅之類

旅の都夢共 古郷 枕かり共 旅の字

一、雑之部

野いろく 真砂 石 岩概瓦 鐘時分 薪 上ノ字 下ノ字 唐衣
稲妻 風鉢 天津風共 狩場 爪木 柴人 簞物 降物みつればは可有難
袂 袖 雫岩共 山共 長閑 さへかへる 朧月 園 閑
如此之類、面に用ひ来る也。再返まては二三七 此道具よし。但、
十句過は居所二句嫌物、再返二も可然。艸茨荳茨等十句過なれ
は、十句過如何様にも可有之。面に一季三季の事、其沙汰なし。

不用物

一、木之類

柏 柴栗く 椎 檉 桃 楸 桑 榭 桂 柞 桐 橘

卯花 朽木 心松 心ノ杉 楓 松花 梨花 榎 槐一 二八

一、草之類

若菜 芹 蕨 蕁 真菰 葎 萱 葎 菖蒲 角組苧 茨

○花かつみ ○もしほ艸 杜若 朝貌 夕かほ 正木 女郎花

撫子 若竹 蓮 海松 山吹 牡丹 忘艸 はせを 萩焼原

苗代早苗此二句嫌に

一、竹類

すゞ 藪 笹 篠 竹の子

一、虫類

鈴虫 はたおり 夏虫 きりくす 梢の虫 一 二八

一、鳥の類

○鷺本伝には用ゆる部は有
天水抄には不用也 神鳥シト 鴟 ○夜鷹 鴨 ○むさひ 鶉 ○呼子

鳥 ○鳥獸 ○鷄 ○山とり ○諸鳥の巢 鳩 鳩 水鷄 貌鳥

鷹 雉子 雲雀雉子雲雀一品は
句嫌によるへし 小鷹同上

一、獸の類

猪 兔 牛 馬 虎 熊 猫 猿共 犬 鹿の子句嫌に

一、人の類

父 母 主 花守 関守 渡守 男 民 賤 一 二九

一、水辺の類

嶋 御崎 塩木 氷柱 溝 笥下桶 築 網代 帆舟共 井 閑

○清水かもと ○初汐 ○棚なし小舟 ○魚火の類

一、居所の類

栖 庵田庵は
可用 床 閨 霧のまかき 壁 葦 家柱 苧屋 艸茨

里古りて ○朽窓 ○松門 ○苧茨

一、旅の類

駅 馬 錢 旅の文 ありま 一 二九

一、雑の類

灯 焼火 天乙女 蕙 御ノ字 琴 酒 詩 哥 糸竹の類

筆の跡 七夕の類 雪月花の似せ物 たとへ物 御祓 写絵

古引板 鳴子 立田姫 佐保姫 皇居 種蒔 弓矢 縣召

司召 蓑笠 扇 霞走 子日 白馬等 鶉衣 身にしむ 市

麻衣 桜田 桜貝 桜鯛 桜人 淋し 侘し 嬉し等 寐覚

畑焼 藻塩火 夢 ○賤 ○家の風 ○初鳥狩一 三〇 ○鶯袖

馬 ○茶摘

以上十句の内へ不用物也。

面十句の内不附詞の事

袖二 湊 片岡二 森 霞二 閑 鶯二 閑

此外可准之。名所二成ルハ嫌之也。

永禄四年 宗養 昌体 議定之。

神前可忌詞

不虫 高根 桜狩 藤衣 桜戸 空虫 山の霞 夕の雨 明石の

渡リ 鳴神 須磨の上野 鼓打 跡なき旅 空_キ床 不類の国
空袖 朝の雲 はかなき旅 月日の隠 化し野 佛となき 夢の世
柵の国 鞠ゆふ あたら国 行水 死出山 鳥辺野 夢の内
古郷もなし 唐の芳野 なげきの床

右応安二年 大原千句_二定る者也。

会席二十五禁之事

「(ウ三)

一、難句の事

一、禁句の事

一、高雑談の事

一、高吟の事

一、あくひ眠等の事

一、遅参の事

一、大食大酒の事

殊更為老躰不似合候歟

一、連哥ひきく出し、執筆にとはる、事

「(ウ三)

一、座敷しげく立事

一、為末座雪月花好む事

一、人の句を出_ス時、隣座の人にそ、めき事

一、一ふしある句を上手案する時、初心として付る事

一、為亭主会席急事

一、人の句を出_ス時、音曲などの様_二声作して出合にもてなして、

礼の間に我句をつくる事

一、座敷興を催す事

「(ウ三)

一、礼の事 殊に出家不似合歟

諸事礼_ハ二度計歟

一、扇をひらきつかふ事

一、其主に不似合句の事

一、無用の食物度々出る事

一、執筆をこして指合をくる事

一、人の句のさし合をくりて我句をとむる事

一、よくもなき連哥しげく直_ス事

一、我句に人の付ぬに座鋪立事

一、我句を我と吟する事

一、句を出しかけて末を直_ス事

「(ウ三)

長享三年八月日 宗祇在判

右以祇公正筆書之。門弟宗知依所望 染老筆者也。

西山遊翁 宗因拜

「(ウ三)

連歌会席法度

一、会日刻限きはまりなば、急々進_ミ寄_リて座列すへし

一、指而無用輩節々不可席立事

一、句を高声に詠吟し、また雑談すましき事

一、扇鳴らすましき事

一、いねふり行跡みたましき事

一、末座の若輩、さし合を高声に言へからず。自然不及指合沙汰し

て」(ウ三) 於書時は、潜に隣座の人に可言伝事

一、其席の宗匠之外、さし合以下不可及諍論事。

一、初心之人不可致句数事

一、我仕たる句に、次の句不附間は不可立席。併不叶義あらは、無

是_ハ悲_シ事

一、満座已前不可立席事

右如件

先師法橋昌叱定所也。

定

- 一、諸礼停止
- 一、一句一直
- 一、出合遠近

但_シ声先

- 一、雪月花の事

- 一、隣座問答

- 一、高吟高笑

執筆宗匠之外

不可指合改め如件。

定

- 一、諸礼停止
- 一、雑談無益
- 一、一句一直

- 一、雪月花一句

- 一、出合遠近

但声先

一座千句ノ時は雑談無益ノ所へ

月句三連と書入へし。

我家_ニ此_二法_ヲ用ゆる時は「(ウ三四)

右旧式也と書へし。

右祇公廿五禁以下旧式四通也。根本式の時_ハ二十五禁しかるへし。千句定式は矢数等の時、可用也。一とせ義仲寺_ニ而、奉扇会の初興行_ニも古式の五定式_ヲ用へし也。文台を立法式の時_ハ、必々為弁抄の五條式を用ゆへし。其時は決して立懐昏たるへし。

「(ウ三五)

夢想式

一、季なしの句を見たる時は、脇の句にて見たる時の季を作るへし。又二句見たる時は、発句脇也。哥を見てもおなし心也。依て上下と言。上の句には季ありて、下の句に季なき時は、上の句を用ひて第三すへし。二句ながら季ある時は、下の句を用ひて第三すへし。

又短句はかり見たる時は、表九句にして「(ウ三五) 夢想の下の句に上の句を付るもの也。ほ句の心にして附句に切字を入る也。たとへ夢想の短句に切字ありとも、附句に切字入るへし。

「(ウ三四)

右奉納夢想等には、五音の続やう、口伝。

五音十声の詞つ、きを取也。

二条家の伝に、親疎の事あり。

「よし野山みねに棚引白雲の

句ふは花のさかり也けり

此哥、正親と言へし。

「小男鹿の妻乞ふ山の葛かつら

くるよなしとや恨_ミ侘らん

此哥には一所疎あり。されとも親の部に入たり。

「色も香もむつまじきかな菊の花

千とせの秋のかさしとおもへは

此哥疎也。親疎は和哥にも連哥にもおしへの一つ也

右奉納伝に親疎の事、専_ニすへから「(ウ三六) 親疎は奉納にかき

りたる事_ニあらず。奉納には、詞つ、き、縁つ、き、音通、連声、

五音、十声、用ゆる也。猶口伝。

(白紙)

「(ウ三七)

「(ウ三七)

(裏表紙)

〈付記〉

本稿をなすにあたり、手錢家の皆様には特段のお世話に預かりました。また、手錢記念館の佐々木杏里様には、細部にわたり懇切なご教示を賜りました。記して感謝申し上げます。

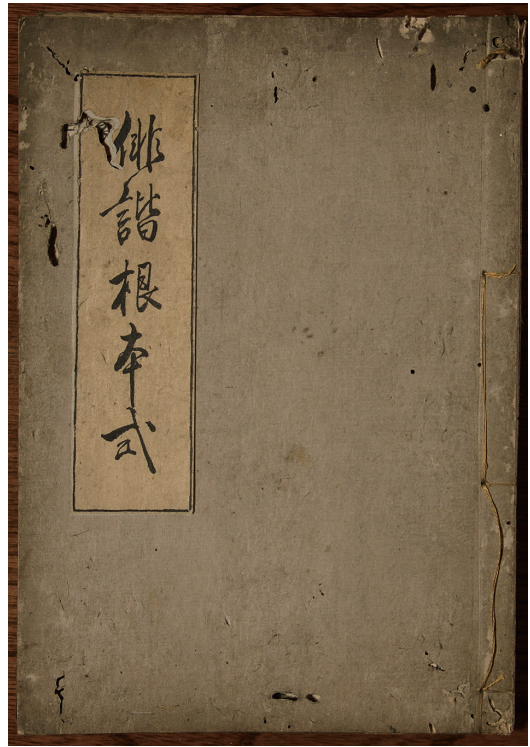
本稿は、山陰研究プロジェクト「山陰地域文学関係資料の研究」(二〇一六～二〇一八年度、代表・野本瑠美)、国文学研究資料館基

幹研究「近世における蔵書形成と文芸享受」(代表・大高洋司)、科学研究費補助金(基盤研究(C))「人を結びつける文化」としての俳諧研究」(研究課題番号二六三七〇二五九、代表・伊藤善隆)の研究成果の一部である。

なお、本稿は、拙稿「季硯句集『松葉日記』—手銭記念館所蔵俳諧資料(一)—」(『山陰研究』第六号、二〇一三年一月)、同「翻刻・手銭記念館所蔵俳諧伝書(二)—手銭記念館所蔵俳諧資料(二)—」(『湘北紀要』三五号、二〇一四年三月)、同「百羅追善集『あきのせみ』—手銭記念館所蔵俳諧資料(三)—」(『山陰研究』第七号、二〇一四年一月)、同「翻刻・手銭記念館所蔵俳諧伝書(二)—手銭記念館所蔵俳諧資料(四)—」(『湘北紀要』三六号、二〇一五年三月)、同「衝冠斎有秀追善集『追善華畧』—手銭記念館所蔵俳諧資料(五)—」(『山陰研究』第八号、二〇一五年一月)、同「翻刻・手銭記念館所蔵俳諧伝書(三)—手銭記念館所蔵俳諧資料(六)—」(『湘北紀要』三七号、二〇一六年三月)、同「椎の本花叔編『椎のもと』—手銭記念館所蔵俳諧資料(七)—」(『山陰研究』第八号、二〇一五年一月)、に続く研究成果である。

（参考図版）

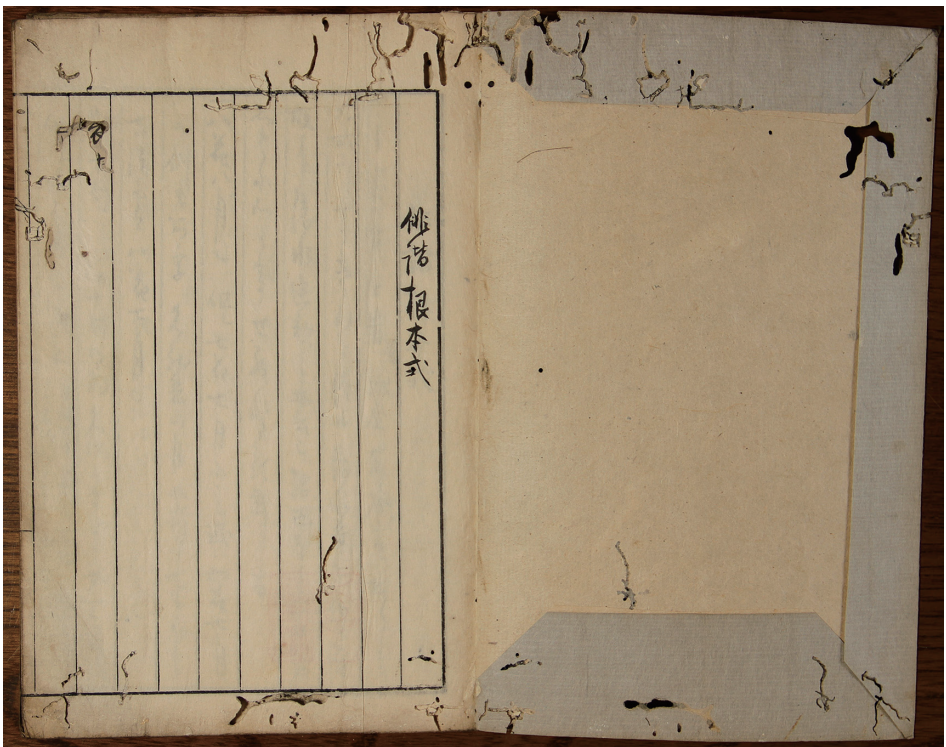
1. 表紙

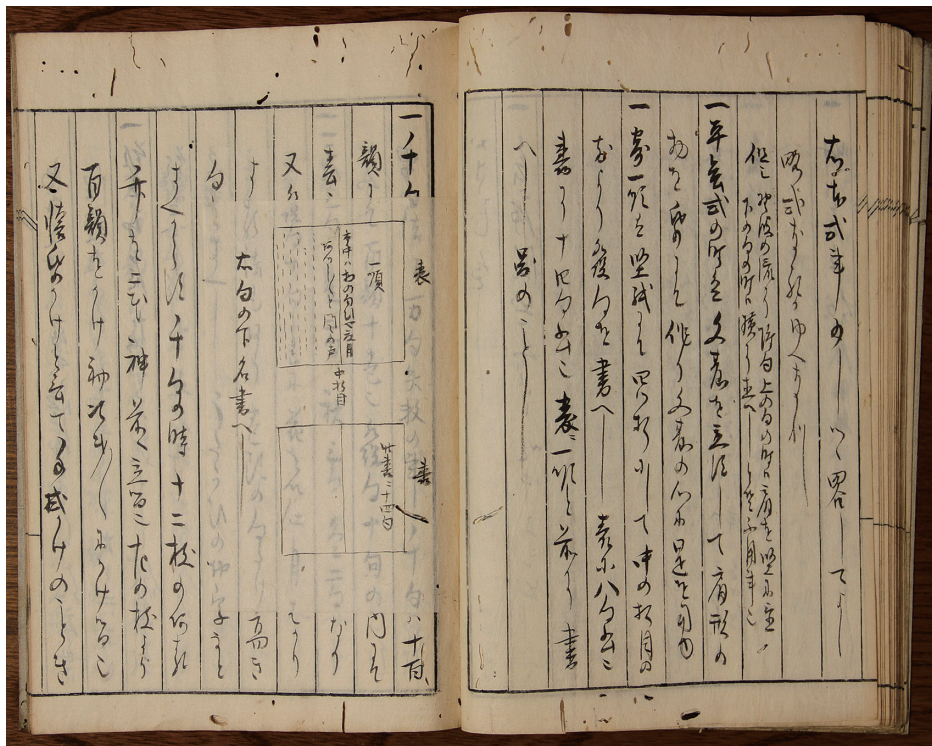


2. 冠李蔵書印（二ウ・部分）

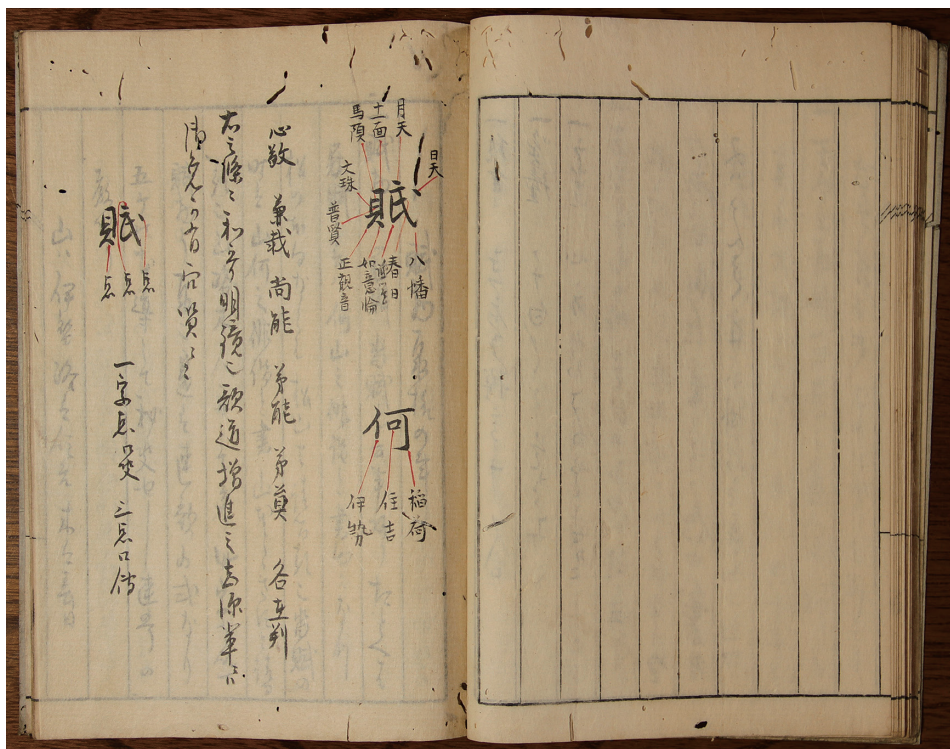


3. 表紙見返し・一才



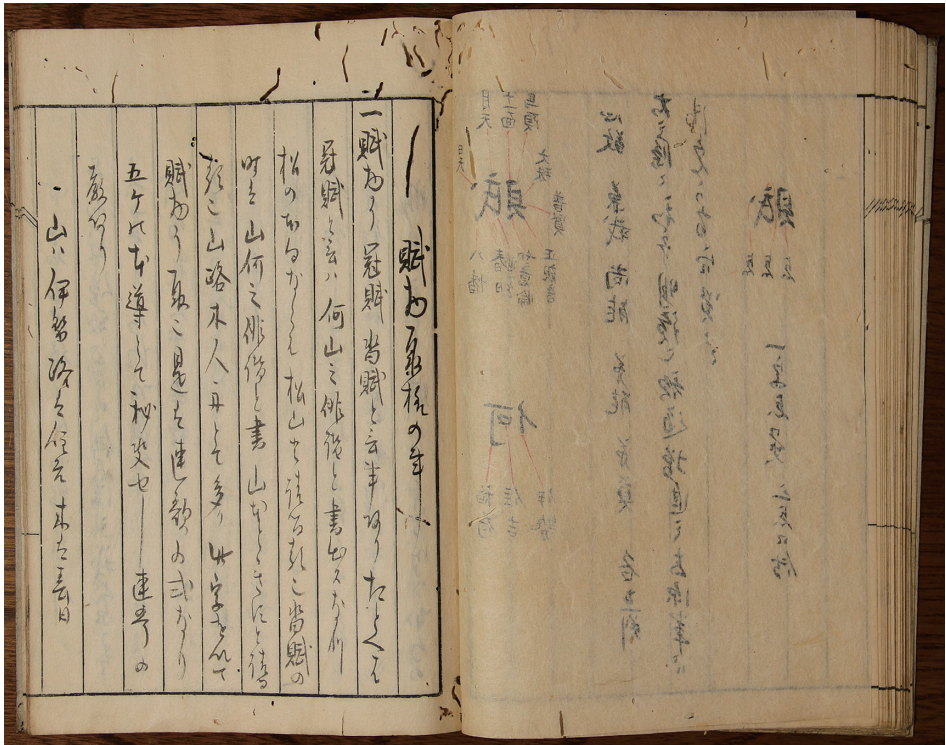


6. 一八ウ・一九才（貼紙）



7. 二二ウ・別紙（表）

8. 別紙(裏)・二二才



9. 三六ウ・三七才(巻末)

